夕刊フジ 2020 6月 13日

定年後の自走人生のススメ

「生き方モデル」の理想を追求

ディレクトフォース探訪（上）

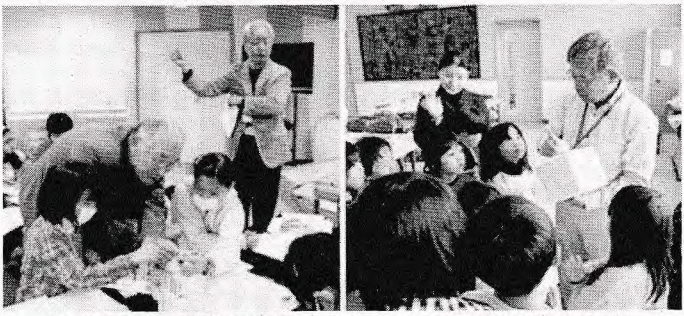
ビジネス街にあるビルの一室を覗いてみると、シニアの男性がエプロン姿で何やら作業をしている。「ハンドクラフトでもやっているのかな？」と思ったが、同じ作品がたくさん出来上がり、箱詰めされている。

「子供たちの理科実験の材料を準備しているんです」。担当者がそう説明する光景は、「一般社団法人ディレクトフォース（DF）」（東京都千代田区、真瀬宏司代表理事）の活動の一コマである。

DFは、現役時代に財界・官界で活躍された方々が一線を退いた後も、「社会に役立ち」「生きがいを感じる」ことを目的として、2002年に設立された団体だ。現在では約640人の会員を擁する。

「私たちは今日まで、社会の要請と会員の熱意をベースにして、様々なボランティア活動に取り組んできました」と語る真瀬代表理事。

冒頭の光景は、DFの社会貢献活動のひとつである「理科実験の出前教室」の準備風景だったのだ。この「理科実験グループ」は、元技術者のDFメンバーが、多くの子供たちに理科を好きになってもらいたい、大きくなって科学技術の分野で羽ばたいてもらいたい、という願いを込めて始めたのだそうだ。もう10年以上の歴史を持つ社会貢献活動だ。



理科実験の出前教室の様子（DFのHPより）

DFは、企業経営に携わった経験を持つ幅広い人材の集まりで、実務経験と知見を備えた会員が多数いて、教育関連活動や企業経営指導を行っている。

「教育関連活動」では、学校だけでなく、地域の市民講座やロータリークラブなどにも講師を派遣している。また、DF会員の出身企業は1200社にも上る。これら多彩な経験を持つ会員の知識・経験・人脈を生かして、ベンチャー・中小企業の営業支援・事業支援などを行う「企業育成支援」も、DFならではの活動だ。

前回、このコラムで提案した「人生モデル」。すなわち、現役時代の生活経済を支える「生計就労」から、徐々に「生きがい就労」への移行を図ることによって、生涯現役を目指そう…というモデルである（ニッセイ基礎研究所前田展弘主任研究員が提唱）。

DFの活動を知り、メンバーの方々とお会いしてみてわかったことは、DFにこそ、「生きがい就労」を実践している人生モデルが存在したということだ。

経済的事情よりも、「生きがい」に人生の価値を求める「生きがい就労」は、決して〝お気楽な生き方〟ではない。世の中に役立つ、他から求められる人であり続けるためには、相応の弛まぬ研鑽（けんさん）が必要だからだ。DFには、そのための秘訣（ひけつ）がある。

（つづく）

定年後研究所　定年3・0

日本で初めての「50代以上会社員」に特化した、定年後ライフの準備支援機関。定年後の「自走人生」を目指す中高年会社員を応援。中高年会社員向け学習システム『キャリア羅針盤』を開発中。ポータルサイト「定年３・０」（https：//www.teinengo－lab.or.jp）

得丸英司（とくまる・えいじ）　「一般社団法人定年後研究所」所長。（株）星和ビジネスリンク取締役専務執行役員。1957年生まれ。日本生命保険で25年にわたり、法人・個人分野のFPコンサルティング部門に従事。日本FP協会常務理事、慶應義塾大学大学院講師などを歴任。日本FP協会特別顧問。

定年後の自走人生のススメ

ディレクトフォース探訪（下）

「100歳社会総研」を設立

現役時代に活躍された方々が、一線を退いた後も、「社会に役立ち」「生きがいを感じる」ことを目的として設立された「一般社団法人ディレクトフォース（DF）」（東京都千代田区、真瀬宏司代表理事）。前回は、その社会貢献活動について紹介した。

小・中学校で行う理科実験教室をはじめ、高校生に「働くことの意義」を教える授業支援プログラム、大学における実学の講義など、教育ボランティア活動だけをみても幅広い。

DFには、これらの活動に加え、各界著名人を招いての「講演・交流会」、会員自らが講師となって行う勉強会、環境や健康問題に関する様々な視点からのセミナーの実施、企業育成支援のための監査能力を高める「企業ガバナンス部会」セミナーなど、たゆまない研鑽（けんさん）に力を入れている。これが、DFが高いレベルの社会貢献活動を提供し続けられる秘訣（ひけつ）ではなかろうか。

DFの会員は、「自分の過去を生かして」社会貢献をするのだが、それだけに甘んじることなく、常に「未来のためにどう役立つか」という視点をもって行動している。これが、DFのフォース（原動力）なのだろう。

そのフォースが、また新しい取り組みをスタートさせた。「100歳社会総合研究所（総研）」の設立だ（2020年2月）。

総研の目的は、①DF会員の「生き甲斐、健康、経済基盤」充実の支援②外部の関連機関との連携、協働③活動の外部発信―の3つだという。「生き甲斐、健康、経済基盤」の充実を追求することは、このコラムでも紹介した「生きがい就労」の実践に他ならない。

総研事務長の藤村峯一氏は「総合研究所ではなく、『総動員研究所』だと思っています。（DFおよび総研の活動を通じて）すべてのDF会員が、100歳社会を生きるロールモデルとしての役割を担っているからです。できるだけ最後まで元気でいれば医療費を削減できる。元気でいるためには生き甲斐と経済基盤がなくてはならない」と熱く意気込みを語る。

2月に行われた「100歳社会総合研究所の創立記念シンポジウム」（DFのHPより）

総合研究所創立記念シンポジウム」で、真瀬宏司DF代表理事・総研所長は、「DF創立30周年の2032年には、日本および世界に寄与できるものを残すことを目標にしている」と抱負を語った。

DF会員の背中を追いかける現役世代では、バブル採用世代が50代になり、団塊ジュニア世代がこれから50代になっていく。総研から発信される「100歳人生DFモデル」に期待が膨らんでいる。

定年後研究所　**定年3・0**

日本で初めての「50代以上社会人」に特化した、定年後ライフの準備支援機関。定年後の「自走人生」を目指す中高年会社員を応援。中高年会社員向け学習システム『キャリア羅針盤』を開発中。ポータルサイト「定年3・0」（https：//www.teinengo－lab.or.jp）

得丸英司（とくまる・えいじ）　「一般社団法人定年後研究所」所長。（株）星和ビジネスリンク取締役専務執行役員。1957年生まれ。日本生命保険で25年にわたり、法人・個人分野のFPコンサルティング部門に従事。日本FP協会常務理事、慶應義塾大学大学院講師などを歴任。日本FP協会特別顧問。